

鶴岡共通語化調査における「方言化」

—個人追跡データの分析から—

鎌水 兼貴(国立国語研究所)

1. はじめに

国立国語研究所では、山形県鶴岡市において、1950、1971、1991、2011年と、ほぼ20年間隔で共通語化の経年調査（以下、「鶴岡調査」）を実施している。各調査回で共通する音声・音韻項目と語彙項目については、国立国語研究所のサイトでデータの公開作業を進めている。2017年4月に第1～3回調査のランダムサンプリングの音声・音韻項目が公開され、同年10月には同一個人を追跡したパネルサンプルが追加された。

本研究では、鶴岡調査のパネルサンプルのデータを用いて、個人の回答の変化について分析を行った。その結果、方言回答に回帰する人が多く、さらに個人差、項目差が大きいことがわかった。

2. 鶴岡調査

2.1 ランダムサンプルによる研究

鶴岡調査のデータは、国立国語研究所のサイトで、「鶴岡調査データベース」として公開されている。2017年10月に公開された「鶴岡調査データベース ver2.0」では、第1～3回調査の音声・音韻36項目について、ランダムサンプルとパネルサンプルのデータが利用可能である。鶴岡調査のサンプルの概要を図1に示す。被調査者は調査ごとに新しくランダムサンプリングによって抽出される。前回の被調査者は、次回以降パネルサンプルとして追跡調査が行われる。

従来の鶴岡調査の成果は、ランダムサンプルの集計結果が中心であった。代表的なものに、図2のような音声・音韻項目の共通語化グラフがあげられる。共通語化の過程がS字カーブにしたがって進むことから、井上(2000)など、言語変化の説明に用いられている。また、実時間調査データとして、調査回ごとに同一世代の共通語化が進むことから、横山・真田(2010)では成人後習得のモデルにも利用された。

鶴岡調査データの公開にともない、前川(2017)は、従来の世代別の平均値ではなく、データを用いて年齢から共通語化を予測するモデルについて検討した。その結果、データのばらつきが大きいことがわかった。このように鶴岡調査データを再検討するうえで、データが公開された意義は大きい。

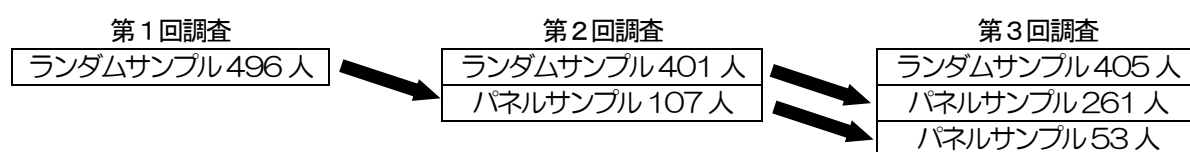


図1・ランダムサンプルとパネルサンプルとの関係

2.2 パネルサンプルによる研究

パネルサンプルは、ランダムサンプルのように地域代表性を持たないが、個人の实時間変化を観察できる。横山ほか(2014)では、第1～3回調査で3回連続回答したパネルサンプル53名について分析した結果、アクセントを除く音声・音韻31項目において、共通語化が進んでおらず、特に男性では逆の「方言化」が進んでいることがわかった。理由として、社会的活躍層時の共通語志向が退職によって低下したものと説明された。この傾向は、図2のランダムサンプルにおいてもみることができる。第2回と第3回の調査を比較すると、同一世代での成人後習得による共通語化が進んでいない。

図3は、パネルサンプルにおける生年層別集計結果である(高田ほか, 2018)。この生年層集団は、ランダムサンプル調査のように調査回ごとに構成員の異なる集団ではなく、同一個人の集団である。図2と同様に音声・音韻31項目をみると、第1回→第2回調査の21年間では共通語使用率が増加したが、第2回→第3回調査の20年間では共通語使用率が減少したことがわかった。横山ほか(2014)でみられた「方言化」がみられた。

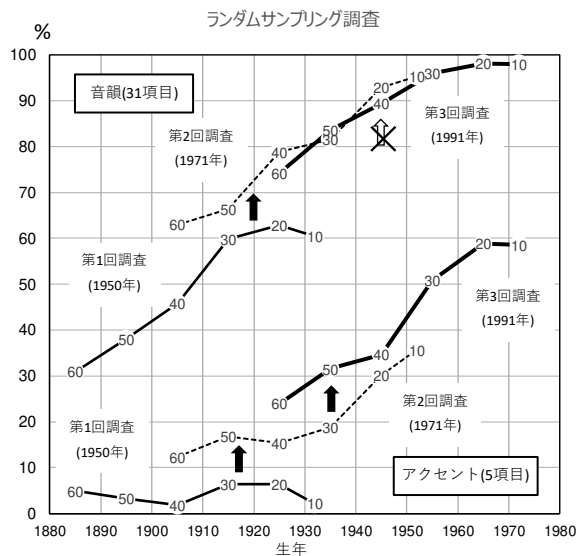


図2・ランダムサンプルの生年層別共通語使用率

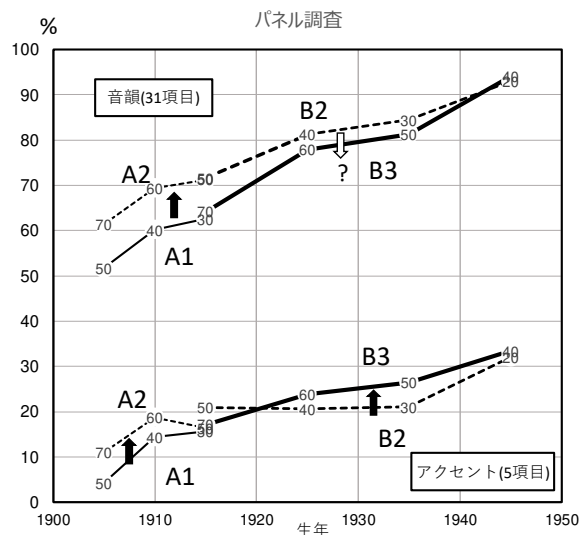


図3・パネルサンプルの生年層別共通語使用率

3. 「方言化」の問題点

こうした「方言化」については、すでに第2回調査の語彙・文法項目で観察されていた(国立国語研究所, 1974)。当時の分析では、その理由の一つに、第1回調査では外来者に不慣れなために共通語使用が増えたが、第2回調査では慣れたために、「方言」を聞きに来たよそのものに対して、いわばサービス精神から、方言を聞かせてやれと考えてものもあろう(国立国語研究所, 1974)と推測している。

また、語彙・文法は音声・アクセントに比べて、使用・不使用をコントロールしやすいため、方言使用の増加は語彙・文法の問題であり、音声・アクセントへの影響は少ないと解説している。しかし第3回調査においては音声・音韻項目においても「方言化」がみられている。

つまり被調査者の共通語能力は、1950年の第1回調査当時から、ある程度高かったと推測される。このような予想外の結果が生じた背景として、方言と共通語の二変種併用が意識されにくかったことがあげられる。調査開始当時は、共通語化が方言から共通語への単純な交替と捉えられており、現代であれば、公的場面と私的場面を意識した、場面差調査を実施するのが一般的であるが、鶴岡調査の設計では何も場面設定を行わずに調査が行われている。

では、鶴岡調査における「方言化」現象は、使用場面を限定しないために被調査者が何を回答したらよいかかわらず、サービス精神の有無に左右されているのであろうか。前川(2017)が指摘した回答のばらつきについても、個人的な要因が大きいと説明される可能性もある。

こうしたことから、個人内変化をみることができる、パネルデータの分析は非常に重要である。

4. 個人の回答の変化

パネルデータにおける、第1回→第2回調査(以下、第1→2回)と第2回→第3回調査(以下、第2→3回)の共通語使用率を集計した。集計においては、便宜的にプラスマイナス2項目の変化は「不変(変化なし)」とみなし、3項目以上の共通語使用増加を「共通語化」、3項目以上の共通語使用減少を「方言化」とした。

図4は、個人の変化をグラフにあらわしたものである。パネル調査における井上編(2017)の表示手法を参考に、同一個人の2回ないし3回の共通語使用率を、生年を中心にずらして線でつないで表示した。

図4をみると、長い線が目立っており、大幅に回答が変化する人が多いことがわかる。「方言化」は、主に1940年代以前の生まれで起きている。1940年代以降生まれの人のほとんどが、共通語使用率80%以上であることが影響していると思われる。また、図4からはわかりにくいですが、年齢別に集計すると、若いときに共通語使用率が高かった人で「方言化」する傾向がある。若いときに共通語使用率の低い人は、1人を除いて全員が「共通語化」もしくは「不変」であった。

表1では、第1→2回と第2→3回の「共通語化」「方言化」「不変」の割合を、性別に集計したものである。第1→2回については、「共通語化」した人が53%で、「方言化」した人は22%にとどまった。しかし、第2→3回では「共通語化」した人は17%にとどまり、「方言化」した人は31%と、大きく上回った。最も多いのは「不変」であったが、これは1940年代以降の生まれの人の共通語使用率が高いことが影響している。

性別の集計では、男性のほうが女性より「方言化」の割合が高い。これは横山ほか(2014)の指摘と同様であるが、男性は第1→2回から「方言化」の傾向が始まっていたことがわかる。

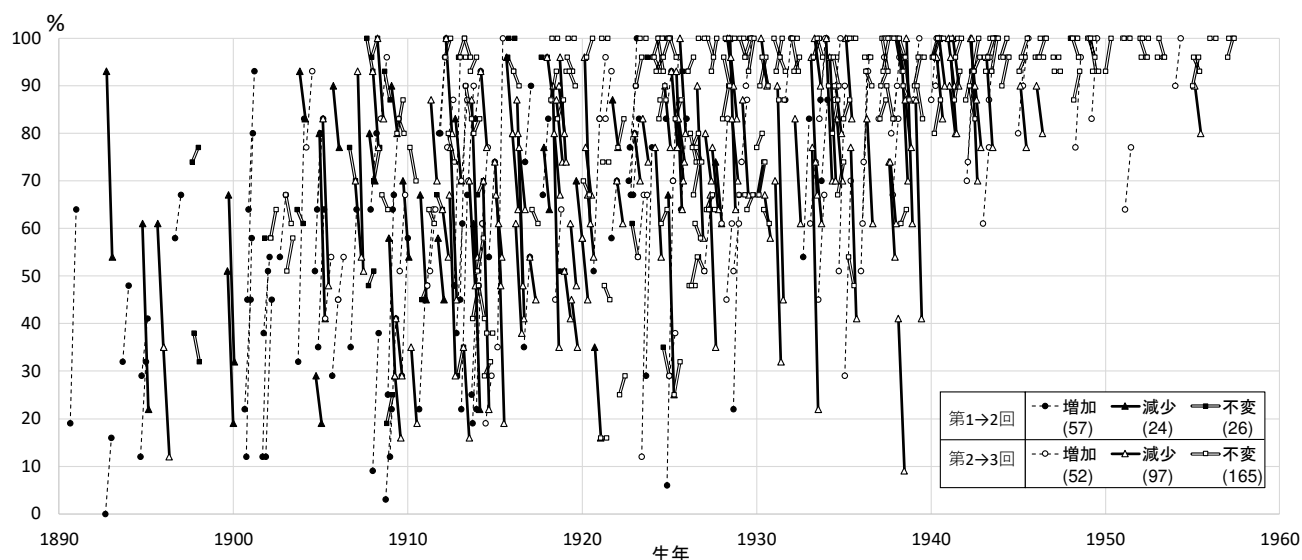


図4・パネルサンプルの共通語使用率

表1・パネルサンプルの共通語使用率の増減

	第1→2回				第2→3回			
	増加	減少	不変	計	増加	減少	不変	計
男性	23 47%	18 37%	8 16%	49 100%	21 15%	51 37%	67 48%	139 100%
女性	34 59%	6 10%	18 31%	58 100%	31 18%	46 26%	98 56%	175 100%
計	57 53%	24 22%	26 24%	107 100%	52 17%	97 31%	165 53%	314 100%

5. 調査項目別の変化

つづいて、どの項目で「共通語化」「方言化」が起こっているかについて、項目別の集計を行った。前回調査の回答と、次回調査の回答のパターンは4種類ある。そのうち、共通語回答から方言回答に変わった人（共→方）の順番に並べて示している。

その結果、第1→2回では「イ→エ」と「中舌音」の項目が高く、第2→3回では「中舌音」と「鼻音性」の項目が高かった。「鼻音性」は第1→2回では「共通語化」が進んでいた項目であり、第2→3回になって「方言化」に転じたといえる。「唇音性」「口蓋性」は、第1回調査の時点ですでに共通語使用率が高い項目が多く、「中舌音」「イとエ」はまだ共通語使用率が低い項目が多かったことが関係していると思われる。

「有声性」は、「唇音性」「口蓋性」に近いが、それらよりは目立たない。第4回調査で新設された質問に、「鶴岡弁らしい」回答を求める質問がある。知識からの方言再生を尋ねる質問だが、その中で顕著だった項目が「ネコ」に代表される「有声性」項目である。共通語の体系にない音声は、方言の再生が困難と思われるため、今後の「方言化」についての課題といえるだろう。

表2・パネルサンプルの調査項目別の「共通語化」・「方言化」

第1→2回							第2→3回						
番号	項目	種類	(共→共)	(方→共)	(共→方)	(方→方)	番号	項目	種類	(共→共)	(方→共)	(共→方)	(方→方)
			共通語	共通語化	方言化	方言				共通語	共通語化	方言化	方言
223	エントツ	イとエ I	49%	6%	29%	17%	231	ウチワ	中舌音 II	52%	6%	25%	17%
231	ウチワ	中舌音 II	38%	9%	21%	32%	224	チジ	中舌音 II	36%	8%	22%	34%
227	スミ	中舌音 I	50%	11%	20%	19%	226	シマ	中舌音 II	56%	8%	18%	18%
222	イト	イとエ II	40%	19%	19%	22%	230	キツネ	中舌音 I	72%	3%	18%	7%
228	カラス	中舌音 I	40%	21%	19%	21%	212	オビ	鼻音性	65%	7%	18%	11%
221	エキ	イとエ I	25%	11%	16%	48%	211	スズ	鼻音性	54%	12%	18%	17%
229	カラシ	中舌音 II	16%	12%	15%	57%	228	カラス	中舌音 I	66%	7%	17%	10%
207	ネコ	有声性	54%	14%	15%	17%	229	カラシ	中舌音 II	34%	9%	17%	40%
226	シマ	中舌音 II	36%	16%	15%	33%	221	エキ	イとエ I	50%	14%	16%	19%
214	カキ	有声性	49%	19%	15%	18%	223	エントツ	イとエ I	66%	10%	14%	10%
224	チジ	中舌音 II	21%	18%	14%	48%	209	マド	鼻音性	68%	9%	14%	9%
206	ハト	有声性	52%	20%	14%	14%	225	チズ	中舌音 I	58%	8%	13%	20%
230	キツネ	中舌音 I	52%	21%	14%	12%	227	スミ	中舌音 I	65%	8%	13%	14%
210	ハタ	有声性	57%	17%	12%	14%	220	イキ	イとエ II	48%	18%	12%	22%
205	ハチ	有声性	53%	20%	12%	15%	210	ハタ	有声性	77%	9%	10%	4%
204	アセ	口蓋性	69%	18%	11%	2%	218	ヒヤク	唇音性 II	72%	9%	10%	10%
218	ヒヤク	唇音性 II	30%	30%	11%	29%	207	ネコ	有声性	74%	12%	10%	5%
203	セナカ	口蓋性	68%	18%	10%	4%	222	イト	イとエ II	71%	12%	8%	9%
215	マツ	有声性	60%	20%	10%	10%	202	ヒゲ	唇音性 II	67%	11%	8%	15%
201	クチ	有声性	56%	22%	10%	11%	201	クチ	有声性	79%	10%	7%	4%
220	イキ	イとエ II	13%	21%	8%	58%	215	マツ	有声性	83%	7%	7%	3%
211	スズ	鼻音性	24%	29%	8%	38%	208	ヘビ	唇音性 II	86%	6%	6%	2%
212	オビ	鼻音性	34%	33%	8%	25%	213	クツ	有声性	82%	7%	6%	5%
208	ヘビ	唇音性 II	39%	34%	8%	19%	214	カキ	有声性	81%	8%	6%	5%
213	クツ	有声性	61%	23%	7%	8%	206	ハト	有声性	81%	9%	6%	4%
209	マド	鼻音性	40%	34%	7%	19%	205	ハチ	有声性	80%	10%	6%	4%
225	チズ	中舌音 I	27%	20%	7%	47%	203	セナカ	口蓋性	88%	4%	6%	3%
202	ヒゲ	唇音性 II	24%	21%	6%	49%	204	アセ	口蓋性	88%	6%	4%	1%
216	スイカ	唇音性 I	68%	26%	3%	3%	219	ゼイムショ	口蓋性	95%	3%	2%	0%
219	ゼイムショ	口蓋性	45%	52%	2%	1%	216	スイカ	唇音性 I	97%	1%	2%	0%
217	カヨウビ	唇音性 I	90%	9%	1%	0%	217	カヨウビ	唇音性 I	99%	1%	0%	0%

6. おわりに

本研究では、鶴岡調査のパネルサンプルのデータから、回答の「方言化」について分析を行った。その結果、共通語使用率が高い人が、方言使用率の高い項目において「方言化」する傾向があることがわかった。しかし 1940 年代以降の生まれの人は共通語化したままであることもわかり、第 3→4 回調査のパネルサンプルにおいても「方言化」がみられるかが問題である。今後は「方言化」する人の傾向について、より詳細に分析する必要がある。

本研究は音声・音韻項目のみであったが、今後、国立国語研究所より語彙・文法項目のデータも公開される予定である。あわせて分析していきたい。

謝辞 1950 年の第 1 回調査より現在まで、鶴岡調査に関わってきたすべての方々に御礼申し上げる。

参考文献

- 井上史雄 (2000). 東北方言の変遷—庄内方言歴史言語学的貢献—, 秋山書店.
- 井上史雄 (編) (2017). 敬語は変わる (大規模調査からわかる百年の動き), 大修館書店.
- 国立国語研究所「鶴岡調査データベース ver. 2.0」<http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/tsuruoka.html>
- 国立国語研究所 (1953). 地域社会の言語生活 : 鶴岡における実態調査, 国立国語研究所報告 5.
- 国立国語研究所 (1974). 地域社会の言語生活 : 鶴岡における 20 年前との比較, 国立国語研究所報告 52.
- 前川喜久雄 (2017). 鶴岡市共通語化調査データの確率論的再検討, 言語資源活用ワークショップ発表論文集, 国立国語研究所, 164-181.
- 高田智和・鎌田兼貴・横山詔一・前川喜久雄 (2018). 鶴岡調査データの再構成, 日本語学会 2018 年度春季大会ブース発表.
- 横山詔一・中村隆・阿部貴人・前田忠彦・米田正人 (2014). 成人の同一話者を 41 年間追跡した共通語化研究, 計量国語学, 29-7, 241-250.
- 横山詔一・真田治子 (2010). 言語の生涯習得モデルによる共通語化予測, 日本語の研究, 6(2), 31-45.